

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	子どもの空想は果てしないか？
Author(s)	日名子, 太郎
Citation	児童の言語生態研究 , 1 : 2 - 5
Issue Date	1968-05-05
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045017">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045017</a>
Right	
Relation	



一、はじめに

この題を与えられて、まず困惑を感じたのは、いかなる意図で企画されたかという点である。通常、子どもは、幼児、学童を通じて、全般に空想的であるかのごとくに思われている。特に幼児期（二才以上就学までとして）においては、子どもの言動を見ると、きわめて空想性、想像性、に富むように思われる。たとえば、ぬれてポタポタとしずくのおちる洗濯物を見て、「アッ、シャツが泣いてるよ！」だとか、赤くペンキを塗って、それが少々垂れた小さな椅子を見て、「椅子がケガしてるよ」などという。このような表現（特に言葉による）だけを聞くと、大人―特に平凡なマジメ人間ほど感銘してしまう。そして子どもの空想力の豊かさ、創造性をたたえてしまうものである。

また、もっと年齢の上の幼児（四、五才）においては、その遊びを見ると、木片がジェット機になったり、箒が馬になったりする。俗謡に、「米の団子か、土の団子か……」などがあるが、子どもの世界では、土や砂の団子は、あたり前のことである。そして、夢中で、彼らの遊びに熱中し、陶醉している様子は、あたかも空想の世界に遊んでいるかのごとくに見える。この様子を見て、大人たちは、ふたたび、子どもとは、何と空想力の豊かなものであるか、それにひきかえて、われわれ大人は何とも……などと歎くのである。

仮に、もし、本題が、このような感激的大人の発想によったものであれば、少々、その発想自体に問題があると思われる。となれば、その盲をとく必要がある。また、そうではなくて、そのようなことは百も承知で、その上で空想そのものについてよりほり下げた意見を求めているのであれば、これまたそれに答える必要がある。以下、まず「空想」という言葉の問題からはいっていこう。

二、「空想」並びに類似の言葉について

表題の「空想」に似た言葉をひろって見ると、想像、幻想、夢想、妄想、連想など、いろいろとあげられる。しかし、この中で、心理学の分野で用語として使われているものは、想像と連想の二つで、また、夢想は、「夢」と若干ニュアンスを異にするが、「夢」そのものは、主として精神分析の分野において、フロイトらにより用いられていることは衆知のとおりである。そこで、その意味を列記すると、

空想⇨現実にはあり得ないこと。  
 現実とは何ら関係のない事を頭の中だけで、あれこれと思いつくらすこと。  
 夢想⇨夢のようにあてもないことを心におもうこと。空想。  
 幻想⇨根拠のない空想、とりとめのない想像。  
 想像⇨実際に知覚に与えられていない物事を、心の中に思い浮かべること。  
 連想⇨一つの考えに伴って、それとの関連で思い浮かぶこと、またそのもの。  
 以上、岩波版国語辞典による

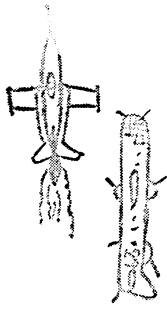
「空想」並びに類似の言葉について

以下想像まできわめて類似した表現内容を示すもののごとくである。

しかし、心理学、精神分析学などの立場から、これらの言葉を考えると、かなりの相違がある。

前にもふれたように、「夢想」は、「夢」のごときものということが根幹となっているが、「夢」について着目し、きわめてその意義、解釈を重視したのは、いうまでもなくフロイト (Sigmund Freud 1856~1939) であるが、有名な彼の「精神分析入門」によれば、「一八七六年にピンツという人は、「夢」とは、あらゆる場合には

# 子どもの空想は果てしないか？



無益な、多くの場合にはむしろ病的な肉体现象であって、低い不毛の砂地の上に紺碧の天空のあるごとく、不滅な宇宙の霊は、この現象の上に超然と高くそびえ立っていると述べた」とあり、これに対して、フロイト自身は、「夢の研究は神経症の研究にとって最良の準備であるばかりでなく、夢そのものがまた一つの神経症的症状であり、しかもすべての健康人にもあらわれるという、われわれにとってはかり知ることのできないありがたい点を持つ症状なので、から、このように逆の道をとっても、まちがいではないはずです。」と、夢の位置付けをしている。このような観点から見ると、「夢」は面白い問題をいろいろと持っているのであるが、ここではわき道にそれるので省略して、「幻想」に移ろう。「われ、幻の魚を見たり」ということばがあるが、いうまでもなく、これは虹鱒の養殖に成功した時に発せられたといわれているものである。この場合、幻の魚とは、実在の虹鱒である。しかし和井内氏は、おそらく、夢の中、あるいは白昼においてすらも幻を見ていたのかも知れぬ。となると、幻想とか、幻とは、そのものは実体がなくとも、何らかの原因で、その

人へのみは実在するかのごとくに思われるもので、和井内氏は、養殖に成功して、われとわが目を疑った、つまり幻ではないのかと一瞬感じたことによつて、この有名なことばが発せられたとも解釈できる。子どもの世界でも、一人っ子などで、過保護に育てられ、彼の友だちと遊びたいという欲求が満たされなかつたり、あるいは自分のわがままのゆえに、友だちと人間関係を作ることに失敗したりすると、よく一人遊びにふけることがある。その場合、登場するのが「幻の友だち」（というより彼に従属する家来といったほうが正しいかもしれない）である。彼は、この他の人には見えない「幻の友だち」(imaginary friend)を相手に遊びを展開する。その世界では、彼は、常に主人公であり、支配者であり、権力者である。「幻の友だち」は、従順に何でも、彼の命令に服従する。そのことによつて、彼は日頃満たされぬ欲求を代償的に満足させる。これは、いうまでもなく、彼の人格形成上、きわめて危険な、病的な状態であり、決して好ましいものではない。時に、これは白中夢(day dream)ともなる。また、アルコール中毒患者は、コーモリ、ネズミなどの幻を見

るものであるが、これは「幻覚」といわれる。さらに、幻想とは、やや異なるが、精神病患者の中には、自分が周囲の人から被害を受けているかのような「妄想」にとりつかれていることがある(被害妄想)。幻想の場合には、虚像を実在しているかのごとくに知覚し、妄想では、ありもしないことを、あるかのように判断し、確信するというところに相違があるのである。

ところが、空想とか、想像となる

と、幻想、妄想、さらに幻覚といったものにおける病的要素がうすらいで、同じ現実にはあり得ないことを思い浮かべるとしても、かなり実体とか、実在の状態、場面などの連関性が密接であり、しかもはるかに健全であることが多い。しかし、どちらかといえば想像の方が、空想より、はるかに具体性が強く、心理学などでは主として「想像」を用いることが多い。

最後に、「連想」についてふれておこう。「連想」で、すぐ思い浮かぶのは、精神分析における「自由連想法」である。これは、分析される人を緊張をといた、意志、批判、判断するといった態度を捨てさせ、しかも自分自身を観察できる程度の状態にお

いて、頭に浮かぶことを、次々にいわせていく方法である。コップ→水→太平洋→ジェット機→北極→キルケネス（ノールウェーの最北端、つまりヨーロッパ大陸の最北端の小さな町の名）……というように、思い浮かべていく。この「連想」には一定の傾向、方向性がありとするものと、全く偶然なものにすぎないとするものがあるが、いずれにしても、「自由連想」においては、意志の作用しない、つまり無意識的なものである。しかし、これに対して意識的に努力する場合もあり得ることはいうまでもない。

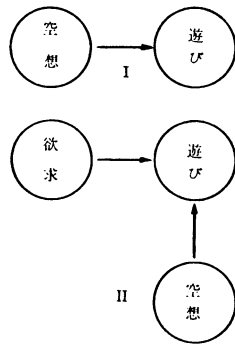
「尻とり遊び」という遊びがある。「イス」―「スイカ」―「カメラ」―「ランプ」―「プール」……、一人で試みれば「連想」の一種となるが、頭文字についての制約があるから自由連想とはいえない。かなり、意志的努力が作用しているといえよう。

### 三、「遊び」の理論を通じて見た子ども もの空想とその限界

さて、本題にはいろいろ。前にも述べたように、子どもは、木片をジェット機とし、箒が馬になる。これは、いったい、子どもの豊かな空想力の賜物なのであろうか。

最近の「遊び」の理論においては、子どもが遊ぶ（特に、ごっこ遊び、役割

遊びなどのは、空想力が豊かだから遊ぶのではなくて、子どもは、自分の周囲にあるもの（現実世界）における欲求―たとえば、ジェット機を操縦したいなど―を満たそうとするのだが、彼の能力からすればほとんどの場合不可能であり、欲求と現実とは常に相反するこの矛盾を解決する活動を「遊び」とするとする。図で示



せば、Iではなくて、IIのように、欲求を満たすために、遊びがまず始められ、その遊びには、いろいろの「空想」が必要とされるので、子どもは空想するということになる。例えば、子どもが、テレビで、グランプリのレースを見たとき。彼は、フェラーリ（自動車の名）にあこがれる。ここまでは、現実である。子どもは、力強いもの、素晴らしいものをあこがれる、そしてそれに近づこうとする。「よし、僕もフェラーリを運転しよう。グランプリに出場するんだ!」と思う。これは、彼の欲求であり、

願いである。しかし、彼は、五才の坊やである。勿論、フェラーリを目のあたり、見たことも、ふれたこともない。でも、彼のフェラーリはある。「みかん箱」―これが彼の愛車である。その名は、「みかん箱」ではない。「フェラーリ」である。彼は、フェラーリに乗る。いや乗る前に、ヘルメットのおごひもをしっかりとつけて、狭い座席に、またがるようにしてはいつて行く動作がある。座席にはいつたら、防塵眼鏡をかけなければならぬ。そして、片手をあげて、整備士たちに合図する。エンジンをかける。力強い震動と爆音、そしてフェラーリは動き出す。彼は、いまやグランプリに出場中だ、モンテカルロか? いや、ここは、団地のアパートのわずかなテラスのみかん箱の中である。彼は、空想によって、みかん箱をフェラーリに変え、テラスをモンテカルロにした。遊びは続く、おそらく彼は優勝するに違いない。そして、彼は、自分の欲求を遊びによって解決している。空想の力を借りて……。大人には、みかん箱とテラスと、そして五才の坊やと何か興奮したひとりとしか見えないし、きこえない。「何してんだらう、この子は?」という疑問と、子どもの空想性がわかる

だけである。前にも書いたように、子どもは、力強いもの、素晴らしいもの、権威あるものにあこがれ、それを自分のものにしたがる。しかも、これらを、彼らの未だ狭い生活範囲内の限られた対象において求めなければならぬ。また、そうした彼の欲求と現実の彼の貧弱な能力との間における矛盾を解消するための遊びを支える空想すらも、彼の発達程度（特に思考、情緒など）と、その生活経験によって左右されるものであつて、けつして無限なものではあり得ない。前に示したI図のように、遊びが、空想から出発したものでないことは、子どもの行動を注意深く観察した人ならば、誰でも、彼らが、実に正確な順序で、彼が求めている行動内容や動作を模倣し、表現することに気付くはずである。その意味で、模倣遊び、ごっこ遊びが、別名「役割遊び」ともいわれるのである。「役割遊び」―ともいわれるのである。換言すれば、彼は、欲求の対象となる人物の役割を忠実に表現しようとする。この場合、役割に関しては、その順序その他、きわめて忠実に模倣するが、場所、道具などについては、空想がこれを補っているのである。と同時に、見落としてはならないことは、その模倣が、役割に付随

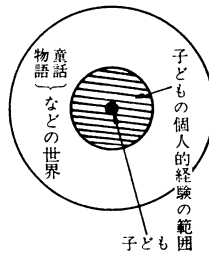
しているき、まりにも波及しているというのである。換言すれば、遊びにおける役割ときまりの統一性は、子どもの社会的内容との一致において保たれるのである。そして、これは子どもの発達に伴って、きまりが表面に出て、空想性は次第にかけをひそめてくるものである。同時に、このことは、より高次元の遊びへの展開を意味することになる。

したがって、子どもの空想は、彼らの発達と、その生活環境と生活経験に大きく左右されることを認識するとともに、健全で、建設的な空想力を育てることを考えなければならぬ。もし、情緒の発達が不十分であったり、また周囲の大人たちが、子どもにとって何の素晴らしさも、感銘もないものであれば、子どもの遊び、少なくとも「ごっこ遊び、役割遊び」の展開は、著しく阻害されるものである。そして、子どもの空想は、きわめていじけた、発展性のないものとしてとどまろうし、あるいは、病的な幻想、妄想めいたものへと流れ、危険性すら考えられる。

#### 四、子どもの空想に対する誤解について

子ども、特に幼児期においては、

その空想、想像力は、大人との交渉によって発達するものである。例えば、その生活経験の中にある大人のはなし、その中には、子どもの直接知らない遠い異国の風物があり、いろいろな人々や動植物などが含まれているだろう。童話、絵ばなし、紙芝居なども、みなよい刺激となる。これらは、次図でもわかるように、子どもの直接的な経験の範囲をこえ



た未知の世界を、子どもの前に展開するからである。ここに、童話や、大人の語りの価値があり、それは子どもの空想の世界を拡張するのにたいへんに役だつたものである。このような生活経験の拡大と、周囲の大人からの偶然的、意図的的刺激は、子どもの空想力を豊かにし、想像の中で、彼らが知覚したものを、分析し、統合して、何かをまとめあげることが急速に進歩する。しかし、この進歩が、あまりに急であるため、時に、彼らがまとめあげた像は、大人から

見ればきわめて不完全であったり、非現実的であることも、けっして少なくはないのである。と同時に、知覚そのものが、幼児期では、未だ完全に発達していないことや、思考の発達の原因として、きわめて、大人から見ると理解しがたい表現となつて、それが絵や、ことばの上に現われてくる。それを大人は、豊かな、創造的な想像力、空想力に富んだという風に解釈しやすいが、

これは大きな誤りといわなければならない。要するに、この頃の子どもが、一見、空想豊かに、しかもそれは限りなく発展するかのごとくに見えるのは、彼らが、まだ精神的に未分化であり、その発達がじゅうぶんでないために、批判力、知識などが欠如していることによつて生じることにすぎないともいえる。しかも、幼児期から小学校進学初期の子どもでは、空想、想像によつて生じる映像が、きわめて明瞭であり、ほとんど知覚に等しいともいえるほどの状態であるから、子ども自身、知覚と想像との間に混同をひき起こしてしまふことが少なくない。私自身、まともな顔で子ども（当時四才の女子）が、「こんな大きな羽（長さ一米）を広げてとんでいる黒いあげは、蝶を見

た」と懸命になつて力説するのを見た経験をもっている。（これを「想像的嘘言」と呼ぶ）そして、このような想像力、空想力の差は、子どもの環境、教育のあり方によつて次第に大きくなつていくものである。

さて、このような子どもの空想、想像も、第二信号系、つまり言語の発達によつて、次第にその姿を変えていく。なぜなら、第二信号系の発達する以前においては、外界の認知は、直接的な経験（これは第一信号系によるものである）によつていたからである。この時代では、思考も、感覚的であり、運動的であつたのが、第二信号系が活動し始めると、体験を観念化し、表象としてあらわすことができるようになってくる。これとは、内的言語（心の中で生ずる言葉を具体化することでもあり、子どもは空想性を失つてしまったかのごとくに見えはじめる。しかし、これは、彼らが進歩している証拠ともいえることなのであつて、けっして悲しむべきことではない。このような意味でも、やはり、子どもの空想は、果てしなくはないといえる。

（玉川大学・玉川学園女子短大教授）